

トマト 灰色かび病について



図1 罹病した果実



図2 ゴーストスポット発生果



図3 芽かき跡からの発生



図4 葉先枯れ部に密生する灰色かび病

1 生態

灰色かび病は糸状菌である *Botrytis cinerea* Persoon によって発病する。本菌はトマトのほか多数の野菜類、花き類、果樹類を侵す多犯性の病原菌である。本菌は被害部に生じた菌糸、分生孢子、または菌核（菌糸のかたまり）で越冬する。また、有機物の上で腐生的に繁殖を続けることができ、これらも伝染源となる。

本病は果実、花弁、茎葉などの枯死部位より発生するが、特に果実での被害が大きい。約20℃、多湿の気象条件時に多発する。本病は主に枯死部位より侵入する。幼果では、咲き終わった花弁やガク枯れ部に灰褐色のカビが発生し、感染部位よりしだいに幼果に広がり、幼果が灰白色のカビで覆われ、軟化腐敗する。また、摘心部位や葉かき跡などの傷痕から茎に感染するとその上位はしおれ、枯死することがあるため、多発すると著しく減収する。圃場の菌密度が高い場合、幼果表面に2～4mmのゴーストスポットと呼ばれる白いリング状の斑点が生じる。ゴーストスポット果は、発芽した分生孢子が表皮に侵入したのち止まった病徴であり、腐敗果に変化することはないが商品性は低下する。

2 発生状況

20℃前後の気温と90%以上の高湿度が続くと発病が著しくなる。

夏秋雨よけ栽培では、梅雨期及び夏期後半から秋期にかけて発生が多く、特に7～8月が低温多湿で推移すると、発病が早期よりみられ、被害が深刻になる。

冬春施設栽培では、11月～4月にかけて発生しやすい。ハウスを密閉しがちになると、多湿環境が続き発病しやすい。

なお、本県ではいくつかの薬剤で耐性菌が認められている。

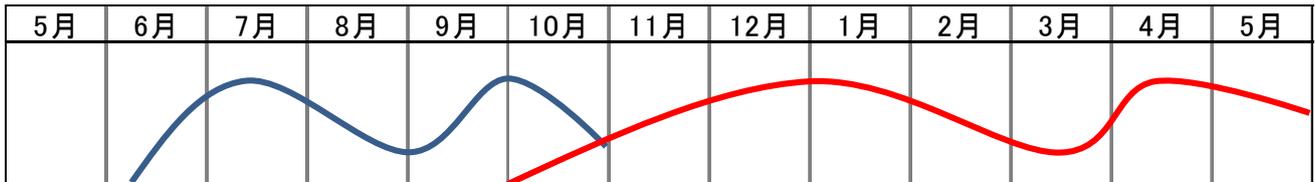


図5 灰色かび病発生の推移 —：夏秋雨よけ栽培 —：冬春施設栽培

3 防除対策

(1) 伝染源の除去

菌密度の上昇が病害多発の原因となるため、発病した果実や葉、枯死した花卉や葉先枯れ部はこまめに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。また、葉かび病やすすかび病などの多発により葉が枯死すると、本病の発生源となるためこれらの病害についても適切に防除する。

(2) 環境の改善

わき芽かき等の管理を適切に行い、通気性を良くする。また、冬春栽培の場合、施設内が多湿とならないよう、暖房機や送風機を利用し湿度の低下を図る。

(3) 薬剤による防除

発生初期の防除を徹底する。

薬剤防除にあたっては、耐性菌の発現を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、系統の異なる薬剤でのローテーション防除に努める。